

国際共修授業における仲介活動についての考察 —CEFR-CV 仲介を意識した実践報告—

阿部祐子

要旨

本稿では、国際共修授業における言語学習の意義や目的を、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）の「仲介」という概念に基づいて再考し、「仲介」を意識的に授業に取り入れた実践について報告する。従来の授業において、筆者は多様な文化的背景を持つ人々が相互関係を深めることで互恵的な学びを得ることを目的とした実践活動を行ってきた。CEFRにおける「仲介」の概念は、これまでの取り組みと多くの点で共通する要素を含んでおり、この枠組みを用いることで、従来の実践をより体系的に整理できるのではないかと考えた。本稿では、CEFR の「仲介」の枠組みを取り入れた 2 回の授業実践の試みについて報告し、その過程で筆者が直面した困難や授業実践に落とし込むことへの課題について明らかにする。

キーワード

仲介、国際共修、CEFR-CV

1. 目的と背景

本稿は、国際共修授業における授業内容を、ヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages（以下 CEFR））の「仲介」という枠組みから再考した実践報告である。筆者はこれまで、留学生と日本人が共に学ぶ国際共修授業において、留学生、日本人学生、地域社会の人々が相互関係を深め互恵的な学びを得るための実践活動を継続して行ってきた（2018、2021 阿部など）。その中で、「コミュニケーション」「相互関係」「協働」などのキーワードと共に、「仲介」という概念への関心が高まり、授業内でも CEFR や「複言語・複文化主義」についての簡単な説明を取り入れるようになった。授業目的として、関係性構築のためのコミュニケーションの重要性や異文化理解のためには自文化への理解の深化が不可欠であることを掲げてきたため、「仲介」という役割は暗黙のうちに重視されてきた。CEFR の「仲介」の概念は、言語的、文化的障壁を越えたコミュニケーションを促し、意味を理解するために協働して新しい意味を作り出すという点で、これまでの取り組みと多くの共通点があると考えられる。ただし、2023 年以前の授業では、CEFR で示される概念を正面から授業で扱うには知識が不十分であると感じており、導入を躊躇していた。しかし、2018 年に CEFR 補遺版（以下 CEFR-CV）が紹介され、関連図書の出版や講演の開催などが続く中で、あらためて「複言語・複文化主義」の理念を意識的に取り入れる必要性を再認識するようになった。また、自分自身の行ってきた実践内容を CEFR-CV における「仲介」の枠組みで捉え直すことで、より体系的に整理できるのではないかという考えを強め、専門家の招聘により自身の不足部分を補いながら、学生と共に実践を通じて「仲介」について探求できるのではないかという考えに

至った。そこで 2023 年の授業からは、特に CEFR-CV の「仲介」に着目し、異なる言語・文化的背景を持つ学生が協働するプロジェクトを通して、学生が自身の仲介活動を意識し、言語学習を社会につながる活動と捉えられる契機となるような授業を目指すこととした。

本稿では、2 年間の実践内容を振り返ることで CEFR-CV の「仲介」を授業に取り入れた試みを報告する。また、それによって明らかになった疑問点や課題をもとに今後の方向性について検討する。

2. CEFR および CEFR-CV の「仲介」

CEFR および CEFR-CV では、「複言語・複文化主義」という言語観を基盤としており、言語使用者を、社会において必要な活動を行う「社会的行為者」とすると位置づける。「複言語・複文化主義」では、言語使用者は母語とともに複数の言語や文化の資源を有しており、それらの知識や経験を状況に応じて相互に関連づけることで、効果的なコミュニケーションが実現されるとしている。そのような言語観に基づき、CEFR では、コミュニケーションを「受容 (reception)」「産出 (production)」「やり取り (interaction)」「仲介 (mediation)」のモードで示す。「受容」「産出」は、従来の 4 技能に整理できるが、「やり取り」は、受容と産出を合わせただけでなく、意味交渉を通して談話を構築していく過程とされる。さらに「仲介」は、この 3 つのモードを含みながらも、言語的、文化的障壁を越えたコミュニケーションを促し、相互理解のために協働して新たな意味を作り出すものとされ、CEFR-CV では大幅な更新と記述の拡大がされている。

CEFR-CV の仲介は、「仲介の活動」と「仲介の方略」の 2 つに分けられ、それぞれについての言語能力記述文 (Can do) がある。「仲介の活動」は、さらに「テキストの仲介」「概念の仲介」「コミュニケーションの仲介」の 3 つに分類される。「テキストの仲介」は、情報を伝える、データやテキストの説明、翻訳、通訳文学などの分析・批判をするなどであり、「概念の仲介」は、グループ活動など、相手との共同作業で自分の背景知識を結びつけ、相手が知識や概念にアクセスできるような共通理解の基盤を作る、「コミュニケーションの仲介」は、複文化の場、意見の相違のあるコミュニケーションを円滑にする、衝突の解決、などとなっている。CEFR-CV の中では、「仲介の全体図」が示されており、「仲介では、言語使用者/学習者は社会的行為者として、意味の構築や伝達のために橋渡しをしたり手助けを行う…仲介の中心関心は、コミュニケーションと学びの空間や環境を創出したり、新しい意味の構築に向けて協働したり、新しい意味の構築や理解を他者に促進したり、適切な形式で新しい情報を伝えたりというようなプロセスを促進させる言語の役割である」と述べられている。

以上のように「仲介」は、複数の言語や文化の資源を状況に応じて関連づけるという「複言語・複文化主義」の言語観に基づいたコミュニケーションモードの実践において、重大な位置を占めており、異なる言語、文化背景を持つ学生が協働する筆者の担当授業で検討するのにふさわしいと考える。

3. 実践の内容

3.1 授業概要と目的

本実践は、筆者の担当する 2023 年及び 2024 年秋学期の国際共修授業「異文化理解の視点から見る日本の社会と文化」という 15 週間の授業として行われた。シラバスには、以下のような概要と目的を掲げている。

概要：この授業では、日本語の語用論をもとに、特に日本語使用における文化的背景や、日本人の典型的な思考パターンに焦点を当てる。これらの要素は、留学生のみならず日本人学生も意識していないことが多い。授業では、異なる文化背景を持つ学生同士の議論や実践的な課題を通じて、具体的な状況における文化的な問題やコミュニケーションの特徴を分析・比較する。授業は原則的に日本語で行われ、留学生には理解を助けるためのサポートを提供するが、文法や語彙ではなく語用論に重点を置く。また、フィールドワークを通じて、地域社会との関わりを持つ機会も提供する。

目的：留学生は、日本語の文化的背景、コミュニケーションスタイル、価値観を理解し、異文化適応能力を向上させる。日本人学生は、自文化への理解を深めるとともに、それが外国人からどのように見えるかを考えることで、価値観の違いや日本社会への適応を支援する力を養う。授業内外での討論を通じて、留学生と日本人学生が相互理解を深め、効果的なコミュニケーション能力を身につけることを目指す。

3.2 履修者と言語レベル

2023 年の履修者は 11 名（日本人 7 名、留学生 4 名（欧米 3 名、アジア 1 名））、2024 年の履修者は 15 名（日本人 9 名、留学生 6 名（欧米 4 名、アジア 2 名））で、授業での使用言語は、基本的には日本語とした上、グループ討論は英語やそれ以外の言語も可とした。英語レベルは全員 B2～C1 程度で、留学生の日本語レベルは B1～B2 程度であった。

3.3 授業内容：「仲介」を意識した授業へ

前述したように本授業では、「協働による関係性構築のためのプロセスの重視」「コミュニケーションの重要性」「異文化理解、自文化理解の必要性」などを目的として掲げていたため、それに関連して CEFR や複言語・複文化主義については、以前から授業内で触れていた。そのため 2023 年以降も授業内容自体に大きな変化はない。ただし、教員としては、CEFR-CV における「仲介」を常に念頭に置きながら、授業の随所で学生にもそれを意識させるように努めた。以下に、新たに補足された内容とともに授業内容についてまとめる。授業の概要は両年ともほぼ同様である。

3.3.1 オリエンテーション、「言語ポートレイト」、「複言語・複文化主義」

1、2 回目の授業では、オリエンテーションと自己紹介を行い、それをもとに「言語ポートレイト」「複言語・複文化主義」について紹介した。まず、この授業は異なる言語・文化的背景を持つ学生同士が協働するグループワークが中心となることを示し、そのための留意点について学生からの意見を求めた。その結果、コミュニケーションを重視すること、グループ全員が内容を理解した上でプロジェクトを進めることなどの合意を得た。続いて、「何のために言語を学習するのか」という問いを学生に投げかけ、それぞれの言語学習の目的について討論の時間を設けた。その後、「言語ポートレイト」について紹介し、学生は自身の言語ポートレイトを作成後、クラス全員で共有した。「言語ポートレイト

ト (Language Portrait) 」とは、自分の言語的背景や言語経験を人型を用いた図に色や形などを用いて表現する活動である。これによって自身の言語資源や言語使用を意識し、自己の一部としてどのように認識されているかを可視化できるため、言語教育での使用も増えている (Busch 2012、姫田 2016 など)。本授業でも学生が自身の持つ多様な言語資源を意識することを目的として活用し、それに関連づけてCEFRにおける「複言語・複文化主義」の概念を紹介した。特に、「複言語能力」とは必ずしも母語話者のような高い言語レベルを目指すのではなく、必要な場面に応じて複数の言語を適切に活用できる能力であること、そして学習者一人ひとりが目的に応じて多様な言語資源を活用する力を育てることで、言語を使って社会で何かを行う「社会的行為者」となることが重要であるというCEFRの理念について紹介した。

以上に関しては、従来の授業よりも多くの時間をかけて取り上げた。筆者の勤務校の学生は言語学習に対する関心が高く、英語だけでなく第三、第四外国語を学習する者も多い。しかし、その多くが言語スキルの向上や母語話者レベルに到達することを当然の目標と考えており、言語学習の目的について深く意識する機会は少なかったと思われる。授業の初期段階に言語学習の目的を再確認することで、学生が自らの留学経験や言語体験を想起しながら考えを深めていく様子が観察された。

3.3.2 プロジェクト

3回目以降の授業は、3つのプロジェクトを中心に行った。プロジェクトは毎回異なるグループで実施し、グループ内には必ず留学生が含まれるような編成とした。グループ討論や発表における使用言語は、基本的には日本語としながらも、複言語主義や最初に定めた約束事を重視して、話し合いの中でだれも取りこぼさず全員が理解していることを確認しながら進めることを常に意識させた。以下に各プロジェクトについて説明する。

プロジェクト1：日本文化についての討論。日本文化を冰山モデルで捉え、水面下にある「見えない文化」について全体で話し合った後、グループで留学生が疑問に感じる日本人の行動を取り上げ、それがどのような価値観に基づいているのか、なぜ違和感を覚えるのかについて、グループ内で討論した。また周囲へのインタビューを通してさらに理解を深め、国際共修授業における協働的学びを促進した。

プロジェクト2：言語景観プロジェクト。外国人観光客や若者の誘致を目的として、地域の企業の要望に応じ、学生が現場視察を行った上で留意点を話し合い、成果物を提示しながら提案を行うプロジェクト。留学生の視点が不可欠であり、日本人学生にとっては当然だと考えられていた点に新たな気づきが促進された。企業や地域観光課という外部向けへの提案やそれに対するフィードバックを得るという実践的な活動である。成果物作成時の協働作業やフォーマルな場での日本語発表に対して相互のサポートが見られた。

プロジェクト3-1 (2023年)：歌の翻訳プロジェクト。中国語とポルトガル語の母語話者の学生 (各1人) が選んだ歌を言語別に2グループに分かれて、日本語と英語に翻訳して歌う活動。グループメンバーは、母語話者の説明によって、それぞれの歌詞の背景にある文化や比喩的表現の理解に努め、適切な日本語と英語訳を考える。グループ内では活発な質疑応答が繰り返され、3つの言語に向き合うことで、学生には文化的背景、言語的相違への気づきが生じた。

プロジェクト3-2 (2024年) : 3つのグループに分かれて、自分たちの関心のあるテーマ設定で行う最終プロジェクト。テーマ設定から、実施方法まですべてをグループ内で協働するため時間をかけた協働作業となった。

3.3.3 CEFRの専門家による「仲介」に関する講義

CEFR-CV の「仲介」を授業に取り込むにあたっての大きな課題は、筆者の理解不足から生じる不安であった。そのため、この内容について知見の豊富な専門家に授業のアドバイスや講義を依頼した点が、以前と比べた大きな変化である。2023 年の授業では、第 14 回目 (最後から 2 回目) の授業で、CEFR や CEFR-CV の知見豊富な専門家を招聘し、特に CEFR-CV 「仲介」についての講義とワークショップを依頼した。まず、①CEFR の概念から言語学習者は「社会的行為者 (Social Agent)」である点を強調して説明がされた後、②CEFR-CV の仲介の図 (Council of Europe 2018、p. 34、図 2) を提示しながら、言語学習・言語教育の中での「仲介」について、「受容」「産出」「やり取り」「仲介」という 4 つのモードを示して説明された。また、③「仲介」には「仲介活動」と「仲介ストラテジー」があり、「仲介活動」はさらに「テキストの仲介」「概念の仲介」「コミュニケーションの仲介」に分けられることの説明の後、④学生が通常行っている「仲介活動」にはどんなものがあるかについて、「同じ言語と異なる言語」および「話すことと書くこと」をテーマとした討論が行われた。この講義を踏まえて 15 回目の最終授業では、改めて筆者から「授業で行った 3 つのプロジェクトの中には、どのような仲介活動があったか」をグループで話し合ってもらった。また同様の内容を、最終リフレクションペーパーの課題にも含めた。2024 年にも、同じ専門家にほぼ同じ内容の講義を依頼したが、プロジェクト実施中に仲介活動をより意識してもらうことができるようにコースの早い時期に実施してもらった。これにより、各プロジェクトの振り返りの際に、どのような仲介活動を行ったか、どのようなストラテジーを使ったかなどの意識化が可能となった。

4. 考察

4.1 2023 年度の授業実践のリフレクションからの考察

2023 年のリフレクションの結果、いずれのプロジェクトにおいても「テキストの仲介」と「概念の仲介」が多く活用されていることが明らかになった。「テキストの仲介」は、情報を伝える、翻訳や通訳など比較的イメージしやすい仲介活動であろう。具体的には、日本語がわからない留学生に英語で説明したり、日本語をやさしく言い換えたりする場面が多く言及された。また、留学生による日本語から英語への翻訳も示されていた。言語だけでなく、絵や視覚的資料を用いた仲介も挙げられていた。以下に具体例を挙げる。

「正規学生 (日本人) 2 人と留学生 2 人のグループで担当したのですが、〇〇荘にはポスターや張り紙はもちろん、支配人さんとのお話も日本語だったため、日本語がネイティブの人にしかわからないような箇所が非常に多かった…メンバー全員が状況をより正確に把握することが大切だと私は考え、ポスターに書いてある内容をできるだけ細かく英語に翻訳してあげたり、逆に支配人さんからのお話をやさしい日本語に訳してあげたりなどのテキストにおける仲介を多く行いました」 (日本人学生 A)

「言語景観プロジェクトでは、〇〇荘のイベントを企画しました…〇〇荘に地域以外の人や外国人を呼び込みたい…地元の人たちとの交流ができる場を作ることが理想でした…頭の中にイメージを…正確に伝えるために、イメージ図を作りました。これはテキストの仲介に当てはまると思います」(日本人学生 B)

「私は留学生の友達の中で平均的に日本語能力が高いため、通訳者として活動することがありました。テキストの仲介をするのが一般的です」(留学生 X)

「概念の仲介」は、相手との共同作業において、自分の背景知識を結びつけて相手が知識や概念にアクセスできるような共通理解の基盤を作る活動である。これは、グループワークにおいて大いに発揮されていた。「日本文化プロジェクト」では日本人の価値観やそれに基づく行動を説明するとき、「言語景観プロジェクト」では漢字や説明書きの多いサインが外国人に与えるイメージ、和菓子の味やテクスチャーをどうやってわかりやすく伝えるかを考えるとき、「歌の翻訳プロジェクト」では、歌詞の背景にある文化的なイメージや歴史的な背景などの理解がないと翻訳はできないことなどが挙げられた。また留学生は自国についての説明をすること自体を概念の仲介として挙げていた。以下に例を示す。

「留学生の視点に助けられた場面が多々あった。ポスターに漢字があっても、簡単な漢字だったらわかるのではないかな…実際には漢字が分からなかったり、漢字自体は知っていても熟語になると意味を理解できなくなったり…びっくりしたのは、漢字は怖いというイメージがあること…」(日本人学生 C)

「(中国語の歌の翻訳で) 中国語で「空気」が「あって当然のもの」の例として使われているのを知ったとき、「空気という言葉をも月に置き換えられないか」「月も毎日昇るもの、昇って当然」と意見を出し皆で月を使った歌詞を考えました」(日本人学生 D)

「私はグループと(自国の)文化との仲介者としても活動しました。〇〇荘に提案できる冬のアクティビティを考えていた際、クラスメイトたちは私の国で冬に何が一般的か尋ねてきました。私は△△を例に挙げ、私にとっては普通のことに對する人々の興味…それは概念の仲介の一例です」(留学生 X)

「コミュニケーションの仲介」に関しては、意見の衝突が少なかったためほとんど使われていなかったが、歌の翻訳において以下のような言及があった。

「(歌の翻訳)の際コミュニケーションの仲介を行うことができました。衝突ではありませんが、似たような意味を持つ単語がふたつあると、どちらにするのか意見が分かれることがありました。そのとき、その単語を選びたい理由を深堀りし、メンバーの意見と意見が繋がるように心がけた話し合いが出来ました。これは、メンバー同士の思いを繋ぐコミュニケーションの仲介だと思います」(日本人学生 E)

以上、学生のリフレクションから、仲介の3つの分類に当てはまるものを示したが、この分類が十分理解できていないと考えられる記述も多々見られた。特に、概念、コミュニケーションの仲介については、以下のような混乱が見られた。

「ディスカッションが多い授業だったため、3 つの中ではテキストの仲介が最も少なく、概念の仲介、コミュニケーションの仲介がより多かった…留学生が日本語が上手だったので難しい日本語を説明したり英語に訳したりする言語自体の仲介というよりは、日本文化の説明など概念の仲介を頻繁にしていました」（日本人学生 F）

「グループワークをしている最中には、コミュニケーションの仲介に務めた。まだ学期の初めでお互いのことを何も知らない状態の中、楽しく円滑に作業が行えるように、会話をした」（日本人学生 C）

「グループワークでは…率先して発言をすることで周りの話し合いを促したり、考えるきっかけを与えるコミュニケーションの仲介をしたと思います」（日本人学生 D）

以上のような学生の混乱は、教員自身の理解が十分でなかったことにも起因する。特に筆者にとって困難であったのは「概念の仲介」である。North & Piccardo (2016) は、仲介を「言語的仲介」「文化的仲介」「社会的仲介」「教育的仲介」の4種類に分類しているが、筆者の中では、この4種類の分類と「仲介活動」における3つのカテゴリーが混同されていた。特に4種類の仲介のうちの「文化的仲介」「社会的仲介」を仲介活動の「概念の仲介」と取り違えて考える場面があった。

4.2 2024 年度の授業実践のリフレクションからの考察

2023 年度の省察を踏まえ、翌年の授業では、3 つの分類の中から比較的理解が容易な「テキストの仲介」のみに焦点を当てることにした。「テキストの仲介」だけでも7つのスケールがあり、それぞれを「どの言語からどの言語に仲介するのか」「だれに対して仲介するのか」などにも注目して検討を促した。その結果自ずと「仲介の方略」にまで考えが及ぶこととなり、この点に関しては前年に比べて充実した内容となったと言える。テキストの仲介活動は前年と重複するものが多かったため、2024 年度の学生のリフレクションからは、仲介の方略に関連した内容の例を示す。

「留学生と会話をする際は相手の好む言語をあらかじめ聞いて把握する…留学生の中でも日本語を集中的に勉強したい人や英語で会話を好む人など様々だ…ある程度日本語で話を進め相手の表情などを汲み取り必要であれば言語を切り替えた…プレゼンテーションを行う時も留学生の日本語のレベルに関係なくやさしい日本語や短文を使用することを心がけた」（日本人学生 G）

「（発表の分担共有の際）使用言語を英語に切り替え、今まで日本語で議論していた内容も英語に翻訳した。難しい日本語はかんたんな言い回しに書き直し、口頭では言いづらいことや新しいアイデアが生まれた時に自由に記述し見返すことができるようにコメントをつけ合う習慣をつけるよう他のメンバーにも伝えた」（日本人学生 H）

「コミュニケーションがうまくいかないとき…①何について話しているのか理解できていない人がいれば翻訳のようにテキストの仲介をする②グループで意見が出ないときは、留学生の国の例を聞いたり、簡単なアイデアを出してから深掘りする③全員参加が大切なので話していないメンバーに理解しているかを確認する」（日本人学生 I）

5. 今後の課題

ここまで、2年間にわたる授業実践を振り返ってきたが、CEFRの深い概念を理解するには時間を要し、それをどのように授業に落とし込むかについては依然として検討の余地が大きい。今回のようにCEFR-CVの仲介の表を提示しながら自分たちの仲介活動を考えるという方法では、実践活動をカテゴリー化して可視化することはできたが、学生にとっては課題が抽象的でわかりにくかっただろう。さらに、授業活動では複数の仲介が複合的に行われることが多く、それがどの仲介活動に該当するかの分類より、実際に仲介活動を通じて何を成し遂げたかを考えることが重要だったのではないか。CEFRにおいて「社会での課題達成を行う社会的行為者にとって最も大切な活動」と位置づけられる仲介活動と本実践がどのように結びつくのかという検討をより重視すべきだったと省察する。

櫻井・奥村(2024)は、6章でCEFR-CVを参照した教育実践の具体例を紹介している。特に仲介活動に関しては、記述文をもとに各レベルの仲介活動の特徴を示す「対象」「活動」「条件」の観点から仲介者像を整理し、具体的な授業での課題を作成する方法を説明している(pp. 119-124)。このように、まず教師自身が記述文をもとに本実践における仲介活動の具体的な場面を再検討する必要がある。筆者は現時点では、仲介活動が記述文としてレベルで示されることについては、十分に理解しきれていない部分もあるが、引き続きCEFRへの理解を深めていきたい。櫻井・奥村(2024)では、また、自分自身に対して新しい意味を仲介することや自ら内省することも仲介活動に含まれる、自分の既存の考えに新たな考えを加えることで新しい考えを構築していく活動になる、とも述べられている(p. 106)。筆者自身の授業デザインの改善に向けた模索の過程そのものが、仲介活動の一環であることを認識しつつ、さらなる検討を続けていきたい。

(阿部祐子・あべゆうこ・国際教養大学)

参考文献

- 阿部祐子(2018)「学生観光サポーター養成の試み—留学生、日本人学生、行政職員の継続的協働活動の実践報告—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』10, 18-28.
- 阿部祐子(2021)「留学生と地域社会との交流実践から考える多文化共生社会」『社会言語科学会』24, 1, 125-135.
- 櫻井直子・奥村三菜子(2024)『CEFR-CVとことばの教育』くろしお出版
- 姫田麻利子(2016)「言語ポートレート活動について」『Études didactiques du FLE au Japon』25, 62-77.
- BUSCH, B. (2012) The linguistic repertoire revisited, *Applied Linguistics*, 33(5), Oxford University Press, 503-523.
- Council of Europe(2001) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*
- Council of Europe(2018) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment: Companion volume with new descriptors*
- NORTH B. & PICCARDO E. (2016) *Developing illustrative descriptors of aspects of mediation for the CEFR*, Education Policy Division, Council of Europe